

腎細胞癌と腎盂移行上皮癌の同側同時性重複癌の2例

林 哲也, 阿部 豊文, 中山 治郎, 岸川 英史
関井謙一郎, 吉岡 俊昭, 板谷 宏彬

住友病院泌尿器科

SYNCHRONOUS IPSILATERAL RENAL CELL CARCINOMA AND TRANSITIONAL CELL CARCINOMA: REPORT OF 2 CASES

Tetsuya HAYASHI, Toyofumi ABE, Jiro NAKAYAMA, Hidefumi KISHIKAWA,
Kennichiro SEKII, Toshiaki YOSHIOKA and Hiroaki ITATANI

The Department of Urology, Sumitomo Hospital

Two cases of synchronous ipsilateral renal cell carcinoma and renal pelvic transitional cell carcinoma are presented, one in a 70-year-old man and another in a 54-year-old man. These two cases were diagnosed preoperatively as synchronous ipsilateral renal tumor and pelvic tumor from urine cytology, retrograde pyelography, computed tomography and magnetic resonance imaging, and in both two cases, nephroureterectomy was performed. Pathological diagnosis was renal cell carcinoma and renal pelvic transitional cell carcinoma, which existed incidentally in the same kidney. To our knowledge, these cases are the 34th and 35th reported cases of synchronous ipsilateral renal cell carcinoma and renal pelvic transitional cell carcinoma in Japan.

(Hinyokika Kyo 52 : 23-26, 2006)

Key words: Ipsilateral kidney, Renal cell carcinoma, Pelvic transitional cell carcinoma, Double cancer

緒 言

重複悪性腫瘍については、近年の画像診断の進歩に伴い、臨床報告例が増加している。しかし、同一系臓器、特に同一臓器に同時に異なる悪性腫瘍が発生する例はきわめて稀である。今回われわれは、腎細胞癌と腎盂移行上皮癌の同側性、同時性重複癌の2例を経験したので、若干の文献的考察を加えて報告する。

症 例

患者1: 70歳, 男性

主訴: 顕微鏡的血尿

既往歴: 虫垂炎, 前立腺肥大症, 膀胱結石

家族歴: 特記すべきことなし

現病歴: 2001年1月, 膀胱結石術後にて他院通院中に顕微鏡的血尿を認めため提出された尿細胞診がclass IVであった。精査のため当科を紹介され受診した。

現症 検査所見: 身体所見, 血液検査では特に異常はなく尿沈渣では尿潜血が3+であった。

画像所見: 腹部CTにて右腎下極に径2cmの腫瘤を認め、内部は不均一に造影されていた(Fig. 1A)。逆行性腎盂造影では右腎盂に陰影欠損を認めた(Fig. 1B)。またその時の右腎盂尿細胞診はclass IVであっ

た。画像上は他臓器に腫瘍を認めなかった。

以上より右腎腫瘍, 右腎盂腫瘍の診断のもと, 2001年2月14日, 右腎尿管摘除術を施行した。

摘出標本: 右腎盂に乳頭状の腫瘍を認め、右腎下極に黄色調で内部壊死を伴う腫瘍を認めた(Fig. 2)。

病理組織所見: 腎腫瘍は, renal cell carcinoma, clear cell subtype, G2, INF α , pT1aであった。腎盂腫瘍は, transitional cell carcinoma, G2, pTaであった。術後4年4カ月を経過した現在, 局所, 膀胱内再発は認めていない。

患者2: 54歳, 男性

主訴: 特になし

既往歴 家族歴: 特記すべきことなし

現病歴: 2004年8月14日, 検診での腹部エコーにて左腎外側に径2cm, 左腎盂に径4cmの腫瘤を認め、精査加療目的にて同年8月17日, 当科紹介受診となった。

現症・検査所見: 身体所見, 血液検査では特に異常はなく, 尿沈渣では潜血が1+であり, 尿細胞診では自排尿がclass III, 左腎盂尿がclass Vであった。膀胱鏡では特に異常所見は認めなかった。

画像所見: 腹部MRIでは左腎外側後方に径2×2.5cmの腫瘤を認め、内部は不均一で外方に突出していた(Fig. 3A)。左腎盂には径4×3.5cmの腫瘤を認め

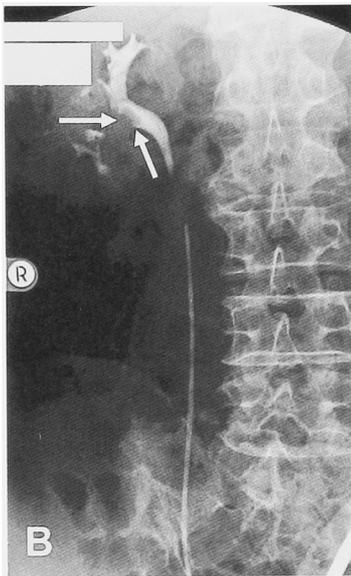


Fig. 1. A: CT showed a renal mass at the right kidney (arrows). B: Retrograde pyelography. Arrows showed the filling defect of renal pelvis.

た (Fig. 3B). 逆行性腎盂造影においては左腎盂に不整な陰影欠損を認めた (Fig. 3C). 画像所見上, 他臓器に腫瘍は認めなかった.

以上より左腎腫瘍, 左腎盂腫瘍の診断のもと, 2004

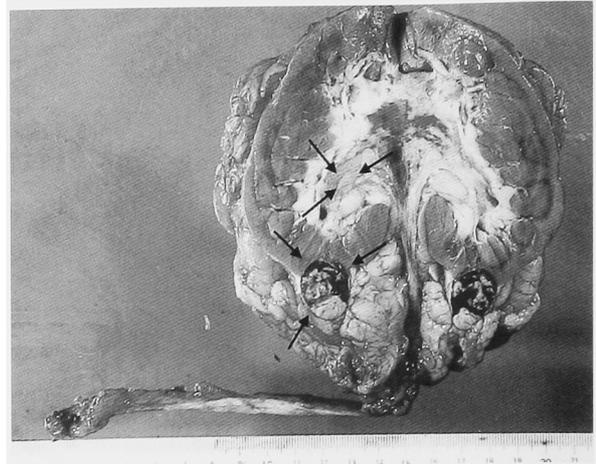


Fig. 2. Gross view of the surgical specimen. There are renal pelvic tumor and renal tumor at lower pole.

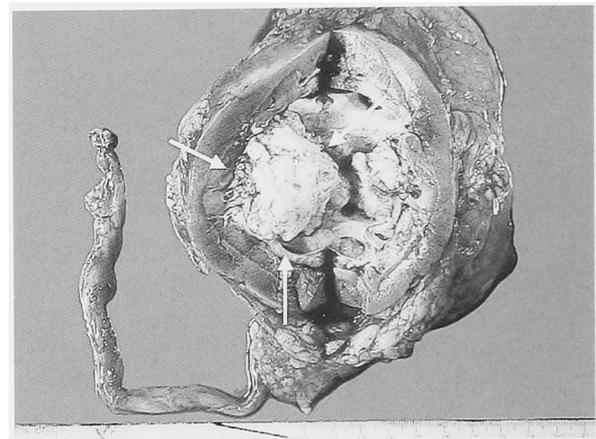


Fig. 4. Gross view of the surgical specimen. There is pelvic tumor (arrows).

年9月14日, 左腎尿管摘除術を施行した.

摘出標本: 左腎盂に白色乳頭状の腫瘍をみとめ, 図にはないが左腎外側にも黄色調で内部に一部壊死を認める腫瘍を認めた (Fig. 4).

病理組織所見: 腎腫瘍は, renal cell carcinoma,

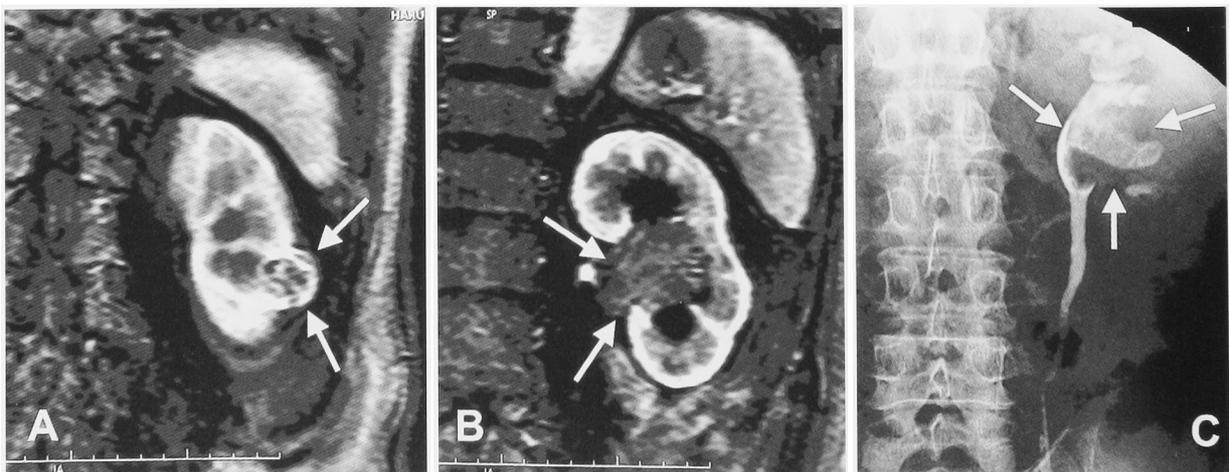


Fig. 3. A: MRI revealed a renal mass at the left kidney (arrows). B: MRI revealed a renal pelvic mass at the left kidney (arrows). C: Retrograde pyelography. Arrows showed the filling defect of renal pelvis.

clear cell subtype, G2, INF α , pT1aであった。腎盂腫瘍は, transitional cell carcinoma, G2, pT1であった。術後9カ月を経過した現在, 局所, 膀胱内再発は認めていない。

考 察

重複癌の定義は Warren と Gates によって, ①各腫瘍が一定の悪性度を呈すること, ②おのおの別個の腫瘍が離れて存在すること, ③1つの腫瘍が他の腫瘍の転移でないこと, とされている¹⁾ ただ, この定義の場合は多中心性をみる腫瘍や両側性臓器に両側発生した場合も重複癌になってしまうため最近ではおのおの腫瘍が別の癌腫であるということもあわせて言われている。泌尿生殖器系悪性腫瘍に併発する重複癌の頻度は4.4~13.3%と報告されている²⁾

同一系臓器, さらには同一臓器に異なる悪性腫瘍が発生することはきわめて稀である。本邦で報告されている腎細胞癌と腎盂移行上皮癌の同側同時性重複癌は33例のみである。初期の報告例は詳細不明なので省略し, 1964年の石沢らの報告例からの28例に自験例2例を含めた30例についてまとめた³⁻²⁵⁾ 年齢は53~86歳, 平均70歳であり, 男女比は5:1で男性に多く, 患側は19:11で左側に多い。同一側の腎と腎盂重複癌の, 発生機構あるいはその背景因子に関しては現在のところ不明である。

さて, 重複癌の正確な術前診断がなされているのは30例中8例にしかすぎない。腎細胞癌と腎盂移行上皮癌が明らかに離れて存在する場合には診断は困難ではないが, すでに過去の報告例にもあるように腫瘍同士が近接している場合や一方の腫瘍が微小な場合には, 治療前診断の困難さが指摘されている。

また, 腎細胞癌と腎盂腫瘍とでは術前診断の誤りが手術治療の誤りに直結する。術前腎盂腫瘍と診断された場合, 術式としては腎尿管摘除術を選択するため, 摘除した腎に腎腫瘍が認められてもさほど問題にはならないと考えられる。一方, 逆の場合, つまり腎腫瘍と診断された場合は腫瘍の部位, 大きさにより腎摘除, 腎部分切除, 腫瘍核出が選択されうる。腎摘除後, 病理診断にて腎盂腫瘍の重複があった場合, 腎盂腫瘍そのものは摘除される, が残存した尿管での再発が問題となってくるであろう。一方, 腫瘍核出または部分切除を施行した場合はまさに腎盂腫瘍をそのまま放置することになり, 後日困難な再手術が必要とされることのほか, 核出術あるいは部分切除術の術中に尿路が開けば癌細胞を播種する危険もある。報告例では術前腎腫瘍と診断されたものが30例中9例あり, うち6例に腎摘除, 1例には腎部分切除が施行されている。

自験例では, 2例とも腎腫瘍は小さいため通常なら

核出術を行っているところである。症例2のように腎盂腫瘍が大きければ容易に診断できるが, 症例1は顕微鏡的血尿精査のために提出した尿細胞診が class IVであったために, そのつもりで精査し小さな腎盂腫瘍の合併と診断しえたが, 通常腎腫瘍の術前検査では診断できなかった可能性が高い。腎盂腫瘍合併の可能性は低いが, 腎腫瘍と診断されても念のために尿細胞診を行っておくべきである。

結 語

腎細胞癌と腎盂移行上皮癌の同側同時性重複癌の2例について, 若干の文献的考察を加えて報告した。

文 献

- 1) Warren S and Gates O: Multiple primary malignant tumors—survey of the literature and a statistical study. *Am J Cancer* **16**: 1358-1414, 1932
- 2) 三方律治: 尿路性器領域からみた重複癌の検討. *日臨外会誌* **62**: 1383-1388, 2001
- 3) 石沢靖之, 石沢芳和: 腎, 尿管に発生する重複腫瘍の1例. *臨床皮膚泌尿器科* **18**: 9-11, 1964
- 4) 松野 正, 上戸文彦, 阿部蘭理, ほか: 同一腎に発生した腎細胞癌と腎盂癌の1例. *臨泌* **31**: 823-827, 1977
- 5) 佐伯英明, 大村博陸, 森 久, ほか: 腎癌と尿路系上皮癌の重複2例. *日泌尿会誌* **71**: 1113, 1980
- 6) 小原信夫, 三輪 誠, 松本哲夫, ほか: 重複癌(腎細胞癌と腎盂・尿管移行上皮癌)の1例. *日泌尿会誌* **72**: 506, 1981
- 7) 松本鉄二: 同一腎に発生した腎細胞癌と腎盂癌の1例. *日泌尿会誌* **74**: 669, 1983
- 8) 徳原正洋, 原田宏行, 石原得博: 異所性骨形成がみられた腎癌の1例. *日泌尿会誌* **75**: 669, 1983
- 9) 森田喜一郎, 濱野克彦, 吉峰一博, ほか: 一側腎における重複癌症例 腎盂癌と腎癌の合併. *西日泌尿* **47**: 291-292, 1985
- 10) 斉藤敏典, 大沼鉄太郎, 中西修道, ほか: 尿中細胞診により診断された腎盂腫瘍に合併した腎癌の1例. *日泌尿会誌* **77**: 364, 1986
- 11) 野呂 彰, 大和田文男, 斉藤 隆: 同一腎に生じた腎細胞癌と腎盂移行上皮癌の1例. *日泌尿会誌* **78**: 357, 1987
- 12) 中嶋孝夫, 平田昭夫, 宮崎公臣, ほか: 同側腎に腎細胞癌と移行上皮癌を合併した2例. *日泌尿会誌* **78**: 557, 1987
- 13) 佐藤和彦, 野口純男, 岩崎 皓, ほか: 同一腎に発生した腎癌と腎盂腫瘍の重複癌の1例. *西日泌尿* **50**: 1037-1039, 1988
- 14) 吉田和弘, 服部智任, 川村直樹: 同一腎に発生した重複癌. *臨泌* **42**: 468-473, 1988
- 15) 荒木富雄, 千種一郎, 加藤廣海, ほか: 腎盂移行上皮癌と腎細胞癌の同側重複腫瘍の1例. *泌尿紀要* **35**: 291-293, 1989

- 16) 小澤輝晃, 高井計弘, 小島弘敬, ほか: 画像上鑑別診断が困難で, 同時に腎盂移行上皮癌を合併した腎細胞癌の1例. 日泌尿会誌 **80**: 625, 1989
- 17) 木村文宏, 川畑幸嗣, 頼母木 洋, ほか: 腎細胞癌と腎盂および尿管移行上皮癌の同側同時発生の1例. 日泌尿会誌 **81**: 1251-1254, 1990
- 18) 酒井直樹, 野口純男, 河本寛治, ほか: 同一腎に発生した腎細胞癌と腎盂移行上皮癌の2例. 泌尿器外科 **4**: 1211-1215, 1990
- 19) 並木一典, 清水弘文, 栃本真人, ほか: 機能的単腎に腎癌と腎盂腫瘍が同時発生した1例. 日泌尿会誌 **82**: 324, 1991
- 20) 谷口光宏, 永井 司, 武田明久, ほか: 腎盂移行上皮癌と偶発腎細胞癌の同時同側性重複腫瘍の1例. 泌尿紀要 **37**: 733-737, 1991
- 21) 辻村 晃, 高原史郎, 小出卓生: 腎細胞癌と腎盂尿管移行上皮癌の同側同時発生の1例. 泌尿紀要 **37**: 1303-1306, 1991
- 22) 松井喜之, 川喜田睦司, 水谷陽一, ほか: 腎盂移行上皮癌と腎細胞癌が同一腎に発生した1例. 泌尿紀要 **44**: 135, 1998
- 23) 鄭 泰秀, 安井平造: 同一腎に腎細胞癌と腎盂腫瘍を合併した1例. 西日泌尿 **60**: 116, 1998
- 24) 斉藤裕一, 山田泰司, 荒木富雄, ほか: 同側腎に発生した腎細胞癌と腎盂移行上皮癌の1例. 三重医 **45**: 1-5, 2001
- 25) 長谷川太郎, 長谷川倫男, 浅野晃司, ほか: 対側萎縮腎を伴う同側同時性腎盂癌 腎癌の1例. 泌尿紀要 **47**: 789-792, 2001

(Received on April 5, 2005)
(Accepted on July 28, 2005)